

しばらくはZoomを用いたオンライン開催を継続いたします。参加方法については、日本医史学会事務局(jsmh@juntendo.ac.jp)にお問い合わせください。

また、本例会でのご発表を随時募集しております。ご希望の方は、演題・希望する月を明記の上事務局(同前)までご連絡下さい。原則として発表者は会員に限ります。

例会記録

日本医史学会 10 月例会

令和3年10月23日(土)
(オンライン)

1. 「本居宣長の医学文書と一字薬名」
吉川澄美(東京都)
2. 第27回富士川游学術奨励賞 受賞記念講演
「白隠禅師の仮名法語にみる「健康」の語の使用」
平尾真智子(健康科学大学看護学部)

日本医史学会 11 月例会

令和3年11月27日(土)
(オンライン)

1. 「徳川幕府の本草政策と『東医宝鑑』の受容」
吉村美香(愛知淑徳大学)
2. 「『彌性園方函』引用医書についての考察」
三鬼丈知(大谷大学)

日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・
日本歯科医史学会・日本看護歴史学会・洋学史学
会 合同12月例会

開催中止

例会抄録

西洋医学の原点, 古代医学文書の解読 ——ガレノス中世写本と校訂本の諸問題

福島 正幸

西洋医学の原点ともいえるガレノスの医学文書に関して、中世写本と校訂本の問題点を中心に報告を行った。

はじめに、プラトンやアリストパネスなどの記述を参照しながら、古代ギリシアにおける書物の歴史、とりわけ文書の保管状況について外観した。またそれと並行して、医学文書の特殊事情、たとえばヒポクラテス『流行病』第1・3巻に含

まれる表現から、天候状況に関する記録が蠟板か何らかの形で集团的に保管されていた可能性について言及した。さらにこれまで日本では触れられたことのないガレノス以外の手による(バッケイオス、グラウキアス、ゼウクシスなど)ヒポクラテスの注解書について触れると共に、古代医学文書の伝承過程について報告した。

このようなパピルス文書は、その後中世写本の

伝承へと受け継がれ、近代校訂本へと至ることとなる。現在われわれが校訂本として入手できるガレノスのギリシア語原典は、全ギリシア文学テキストの総量の20%を占めるとも言われるほど膨大であり、ホメロスやギリシア悲劇などと異なり、テキスト校訂という点においてはまだ発展途上であるといえる。

ギリシア語の原典テキストを取めたガレノス全集校訂本は、アルドゥス版 Aldina (1525年)、パーゼル版 Basiliensis (1538)、Chartier 版 (1638–1689)、Kühn 版 (1821–1833) の4つが入手可能である。そして、本報告でも指摘したようにパーゼル版はアルドゥス版の、Kühn 版は Chartier 版のテキストをほとんど無批判に転用したものであり、テキスト校訂の際にはむしろアルドゥス版と Chartier 版に注意を向けねばならない。ただし、両者ともどの写本を元に校訂本を作成したのか正確には知ることができず、さらに当時参照していた諸写本の一部が現在は散逸している点も考慮する必要がある。

本報告では、ガレノスの『疾患部位について *De locis affectis*』に関して、比較的新しい Gärtner の校訂本 (2015) における写本の系統図 (Stemma codicum) の有効性を取り上げた。まずガレノスの中世写本は他の作家と比べても数が非常に多く、そのためラッハマン法を安易に適用することには疑問が残る。さらに近年 N.G. Wilson により Ἰωάννικος という写字生およびそのグループによって作成された諸写本の年代測定が大幅に修正されており、Wilson 以前に作成された系統図の影響関係を当該テキストへ持ち込むこともできない (例えば、『身体諸部分の用途について *De usu partium*』を取めた Laurentianus Plut. 74. 4 は 14–15 世紀から 12 世紀と同定が大幅に修正され、『解剖手技 *De anatomicis administrationibus*』の最有力写本 Parisinus gr. 1849 も 14 世紀から 12 世紀と改められた (ただし図書館のカタログは現在も 14 世紀のままとなっている)。そしてこうした問題点が

Gärtner の校訂本では軽視されていることを指摘した。また Gärtner の校訂本では、写本が正しく読まれず、apparatus criticus において誤った写本情報が提示されていることもあり、写本の現物をみることの重要性を改めて強調しておきたい。近年写本のデジタル化が進み、ガレノスの重要写本の多くはオンラインで調査可能であり、校訂者のための資料としてのこれらの価値は写本原本に劣るものではない。したがって、「写本の現物をみること」は必ずしも実地調査を意味しない。実地調査は写本校合の最終段階で必要不可欠なプロセスであるが、逆にいえばそれ以前の大部分の過程はオンラインあるいはマイクロフィルムでも充分可能であり、本文校訂に関わる文献学的な基礎作業の障害は、ほとんど存在しないことを改めて確認した。

本発表では時間的な制約もあり、具体例をすべて挙げることはできなかったが、本作品の写本間の影響関係については、saut du même au même と呼ばれる種類の写字生の誤写について Laurentianus Plut. 74. 30 (12 世紀) と Parisinus gr. 2157 (15 世紀) を例に説明した。

また写本伝承と校訂本との関係では、とくに Chartier 版の問題点および Diels のカタログにおける写本分類の混乱を示した。また、校訂本の作成にあたっては諸写本の校合のみならず、近年とりわけ注目を集めているラテン語・アラビア語訳の重要性について、『予知について *De praecognitione*』などの具体的な箇所を提示しつつ報告を行なった。

最後に、本報告後の質疑応答において、真柳誠先生 (茨城大学名誉教授) からギリシア医学と中国医学に共通するいくつかの諸問題について、極めて重要なご指摘を賜り、また報告後に貴重な資料をご提供頂きましたので、この場を借りて御礼申し上げます。

(令和3年6月例会)